

和紙の地は一旦筆を入れると
二度と元に戻らない。

日本画を通ってきた者は
皆この怖さを知ってる。

余白の白が、これ以上の
明度と彩度はないからだ。

胡粉で隠へいしても、
表現上は異物なものが
乗っかってくる。

最終的にどこに
最高の白を残すのか。
だからある程度の完成を
見越さないと
手を入れられない。

でも、やらかしてしまつた方が
想像を上回ることがあるじゃん
と自分の背中を押してみる。

——「余白突破」二〇一九年三月十九日











アトリエでの《メメントの森》制作風景